

ある中国人女性の神戸における医療伝道

——金雅妹の前半生——

成 田 静 香

1 はじめに

金雅妹（1864-1934）は清代の中国に生まれ、日本で初・中等教育を受け、アメリカで医学を学び、後に中国へ帰って西洋医として活躍した人である⁽¹⁾。彼女は近代中国女性初の西洋医とみなされており、その生涯についてはいくつかの先行研究がある。しかしその足跡が中国・日本・アメリカにまたがっているためか、未だ明らかにされていない部分も多い。例えば1889年から神戸で南メソジストの仕事に従事したとされているが、具体的に何をしたのかは知られていない。そこで筆者は当時の神戸におけるアメリカ南メソジスト監督教会の記録にあたり、神戸における金雅妹の活動を探ることとした。

金雅妹の養父は中国・日本伝道を行った宣教師であり、日本において文部省のお雇い教師も務めた、アメリカ人マッカーティーであり、彼についてはすでに研究の蓄積がある。本稿はそれを整理することによって、これまで誤解されてきた金雅妹の来日時期を始め、いくつかの点を明らかにし、同時に金雅妹の医療伝道に養父母が与えた影響に言及する。

また金雅妹はアメリカで医業を修めた後、アメリカ改革教会婦人伝道局の支援を受けて帰国したとされている。アメリカの婦人伝道局については小檜山ルイの研究がある（小檜山，1992）。小檜山はアメリカの婦人伝道局の成立、それを国内で支えた婦人たち、そこから日本へ派遣された独身婦人宣教師の活動等を追うことによって、1890年から第1次世界大戦までを最盛期としたアメ

リカの婦人伝道の大きなうねりの実態を明らかにしている。本稿はこの小檜山の研究に教示を受けて、金雅妹が婦人伝道局から受けた「支援」の性格を明らかにし、またその前後——大学での医学の勉強から神戸での伝道まで——の活動についてもアメリカの婦人伝道との関わりのなかでとらえなおしていく。

以上を通じて、アメリカ人宣教師による養育と、アメリカにおける婦人伝道の波を受けて、金雅妹が未婚婦人宣教師となり、その中で自らの使命——女性や子供のための病院と看護学校の経営——を獲得していった過程を浮き彫りにしていきたい。

金雅妹は同治3年4月4日（1864年）生まれ、^{ぎん}鄞県梅墟（現浙江省寧波市鄞県）の人である（金韻梅墓碑。浙江省鄞県地方志編委会，1996，2072頁）。父鼎禹は余姚（現浙江省余姚市）の教会の牧師であった（李固陽，1993，50頁。Shoemaker, 1904, p. 174）⁽²⁾。母は陳氏といった（金，1988，60頁）。金雅妹は1866年、父母をコレラで失い、アメリカ長老会の宣教師マッカーティー夫妻に引き取られた（Shoemaker, 1904, p. 174）。このことがその後の彼女の人生を大きく変えたのである。そこでまず養父母について見ていく。

2 養父母マッカーティー夫妻

金雅妹の養父マッカーティー（Divie Bethune McCartee, 1820–1900）は1820年フィラデルフィアに生まれた（Rankin, 1902, p. 497）。マッカーティーは海外伝道に関する雑誌が宣教医の不足を訴えているのを読んで、それに応じ、1843年アメリカ長老会海外伝道局の要請を受けて、中国へ向かった（Speer, 1922, pp. 35–40）。

出発の前、母親は自分が若い頃の出来事——プロテスタント宣教師として最初に中国伝道を行ったモリソンが1807年の出発の際、彼女の家数週間滞在したことがあり、そのとき自分もいっしょに行きたいと思った——を語り、「自分の場所」へ息子が行くことになったと喜んだという（Ibid., p. 41）。

マッカーティーは1844年6月（道光24年）寧波に着いた。彼は定住の意

図をもって寧波へ入った最初のプロテスタント宣教師であった (Shoemaker, 1904, p. 172)。1845年、7名のメンバーによる長老会寧波教会を設立、これは中国大陸最初のプロテスタント教会であった (王, 1987, 99頁)。そして長老会寧波教会は男子寄宿学校、印刷所、女子寄宿学校、施薬所などを次々と開設していった (Speer, 1922, pp. 89-92)。

1853年 (咸豊3年) 長老会寧波宣教部の婦人宣教師と結婚 (Rankin, 1902, p. 497)。1861年 (咸豊11年、文久元年) 夏、夫婦とも病気になる、療養のため日本へ来た。そこでヘボン、フルベッキなど、日本伝道の開拓者たちと知り合った (Speer, 1922, pp. 149-157)。

1862年 (同治元年) 宣教のため芝罘^{チーフ} (現山東省煙台市) へ。彼は医療を通じて土地の人々と親しくなり、宣教も進み、やがて教会設立にまでいたった (Ibid., pp. 135-143)。

1865年寧波宣教部の要請で寧波にもどった (Ibid., p. 141)。すでに述べたように、その翌年金雅妹の両親が相次いで亡くなり、マッカーティー夫妻は金雅妹をひきとった。このとき雅妹には7歳の兄がいて、いっしょにマッカーティー夫妻にひきとられている (Shoemaker, 1904, p. 174)⁽³⁾。

1869年マッカーティーは休暇をとってアメリカへ帰国。1870年12月再び寧波へ。このときマッカーティーは資金と薬と医療用品を携え、永住する決意で戻ってきた。しかし寧波到着後、早速病院と孤児院を開く準備にとりかかったところ、同僚からの思いがけない反対にあって、中止を余儀なくされた (Ibid., p. 175)。そして1872年1月寧波を離れ、上海の美華書館へ転任。しかしその後、宣教師も辞めてアメリカ領事館の通訳官に就いた (Ibid., p. 175; Speer, 1922, p. 158)。

1872年7月 (明治5年) マリヤ=ルーズ号事件が発生。その処理のため中国人判事の助言者として来日 (渡辺, 1996, 184-185頁)。その際、旧知のフルベッキに説得され、文部省のお雇い教師として、そのまま日本に残り、1877年4月まで、第一大学区第一番中学、またそれが改められた東京開成学校 (現東京大学) で教えた (小澤, 1964, 175-184頁。渡辺, 1996, 185-186

頁)。

1877年5月3日(光緒3年)、上海アメリカ領事館の要請により、新橋駅より中国へ向かった(小澤, 1964, 183頁)。上海ではアメリカ副総領事などを務めたが、同年秋、日本駐在中国公使館の書記官として3年の契約で再び日本へやって来た(Speer, 1922, pp. 161-162; Murray, 1902, p. 74)。

この間、金雅妹は常に養父母と一緒であったようである。したがって金雅妹が日本に居を移したのは1872年、9才のときということになる⁽⁴⁾。

一方、後のマッカーティー夫人ジュアナ・ナイト(Juana M. Knight, ?-1920)はアメリカ長老会から派遣された最初の未婚婦人宣教師であった(Rankin, 1902, p. 497)。彼女は1852年、姉ランキン夫人の寧波の女子寄宿学校を手伝うため寧波へ向かったのであった(Speer, 1922, p. 23)。小檜山によれば、アメリカのプロテスタント海外伝道においては基本的に夫婦を一組として任地に送ったという。その場合、妻は「準宣教師」として派遣され、その主たる役目は主婦として夫の世話をし、子供を育て、家庭内の雑事を処理することであった。しかしアジアでは女性の社会に男性が近づきにくいことが多く、そこには妻たちが夫に代わって入っていく必要があった。そのため妻たちは家の中での本来の役目の上に、家を出て伝道にかかわることで、加重負担になることが多かった。そこでもっぱら伝道に力を注げる女性として独身婦人宣教師が求められたという(小檜山, 1992, 19頁)。

のちに触れることになる婦人伝道局——独身婦人宣教師の派遣という目的をもつ——がアメリカに成立するのは1861年のことであり、ジュアナは後に婦人伝道局によって大量に派遣された独身婦人宣教師の先駆けの一人と見なされる(前掲書, 63頁)。

若き日の母の願いを実現して中国に渡り、寧波で伝道の道を開き、芝罘で医療伝道に成功し、しかし寧波での本格的な医療伝道の実現を阻まれ、中国宣教師部を辞したマッカーティーと、未婚婦人宣教師の先駆けであったマッカーティー夫人によって、金雅妹は育てられたのであった。

3 アメリカ

1880年、マッカーティーの日本駐在中国公使館における任期が満了し、金雅妹は養父母とともにアメリカへ行った (Rankin, 1902, p. 502)⁽⁵⁾。そして彼女は医学を学び始め、1885年5月、22才にして、ニューヨーク婦人子供病院付属女子医科大学を首席卒業した (Maxwell, 1934, p. 413)。

ニューヨーク婦人子供病院は、アメリカで女性として最初に正規の医学の学位を取得した医師エリザベス・ブラックウェルが1857年に設立したものである。この病院のスタッフは女医ばかりで、彼女達の活動は地域社会にまで及んだ。彼女達は病気の貧困者を世話する医師のほか、保健・衛生と衛生施設について婦人達に指示を与える医師をも雇った (ドラン, 1978, 231頁)。女子医科大学はそこへ1868年に設立されたものだった (James, 1971, p. 164)。

金雅妹は卒業後、フィラデルフィア、ワシントン、ニューヨークで働いた。マウント・ヴァーノンの中国人救済院 (Chinese Asylum)、ニューヨーク婦人子供病院では住み込みの医師を数ヶ月務めた (Maxwell, 1934, p. 413)⁽⁶⁾。女医ブラックウェルの成功は偏見と社会的圧力に抗しながら、貧民地区での救済活動で患者の信頼を勝ち得たことによってもたらされたという (小檜山, 1992, 56頁)。金雅妹が卒業した時には、ブラックウェルがニューヨークで開業してから30年以上の時間が流れていた。しかし女性医師の働く場は未だ限られていた。まして中国人女性医師ともなれば、より一層限られたことは想像に難くない。しかし金雅妹は臨床で活躍するだけでなく、1887年7月「組織学的対象の顕微鏡写真術」と題する論文を発表し、高く評価されたという (King, 1887, pp. 7-11)。

4 厦 門

従来、金雅妹の帰国は1888年 (光緒14年) とされてきた。しかし上の論

文の著者所在地は中国廈門となっている。したがって金雅妹は遅くとも 1887 年 7 月までに帰国していたはずである。その際、彼女はアメリカ改革教会婦人伝道局の支援を受けて、廈門へ行ったとされている (Maxwell, 1934, p. 414)。

アメリカでは 1861 年以降、特に独身婦人宣教師を派遣することを目的とする婦人伝道局が続々と組織された。アメリカ改革教会婦人伝道局もその一つで 1875 年に設立されたものである (小檜山, 1992, 21 頁)。婦人伝道局は女性による女性を対象とする医療伝道に意欲的であった。例えばアメリカ長老会のフィラデルフィア婦人伝道局では 1882 年からペンシルヴァニア女子医科大学において奨学制度を実施し、卒業生を海外へ派遣していた (前掲書, 107-108 頁)。

金雅妹がアメリカ改革教会婦人伝道局の支援を受けたということは、つまりその婦人宣教師として派遣されたということである。その場合、婦人伝道局は金雅妹の旅支度を整え、給料を支払い、彼女が行おうとするプロジェクトが要する資金を準備したはずである (前掲書, 20 頁)。

金雅妹は上海に着くと早速、西洋薬および西洋の学問を広めること、女子医薬看護学校を開くことを政府に上書したが、支持されなかったという (金, 1988, 60 頁)。そこで廈門の病院で働いたが、マラリアに罹ったため、日本へやってきたとされている (懷, 1937, 369 頁。Maxwell, 1934, p. 414)。

このころ養父マッカーティーは 1887 年 (明治 20 年) 8 月、日本でアメリカ人の天文学者トッドと皆既日食の観測を行った (Speer, 1922, p. 176。武内, 1995, 272-273 頁)。その後 1 年廈門で個人的に宣教を行い、続く半年、神戸で同じように宣教を行ったという (Rankin, 1902, p. 502)。したがってマッカーティーは帰国した金雅妹の後を追っていたのである。彼はかつて頓挫した医療伝道を、医師に育て上げた娘、金雅妹とともに行くべく廈門へ行ったのであろう。ところが金雅妹がマラリアに罹ってしまった。そこで 1888 年、療養のため日本へ転じたものと考えられる。

The Japan Christian Year Book は金雅妹が 1888 年マッカーティー夫妻と

ともにアメリカ長老会日本宣教部の一員として来日したものの、1889年、南メソジスト監督教会の宣教部に加わったとしているが、マッカーティーも神戸ではアメリカ長老会の宣教師という身分ではなかったはずで、神戸で半年過ごす間に、長老会日本宣教部で働くことを志願したものと考えられる(*The Japan Christian Year Book*, 1935, p. 340)。そして一家は1889年東京へ移り、マッカーティーは同年4月からアメリカ長老会東日本宣教部の仕事に就いた(Rankin, 1902, p. 502. 渡辺, 1996, pp. 193-194)。

5 神 戸

アメリカ南メソジスト監督教会は、プロテスタント宣教師の初来日に遅れること約30年、1886年神戸で日本伝道を開始した。最初の宣教師J・W・ランバス夫妻、W・R・ランバス夫妻、O・A・デュークスは中国伝道から転じてきた人びとであった。そして読書館(現パルモア学院)、日曜学校、広島英和女学校(現広島女学院)、会堂を相次いで設立、1888年関西学院の設立を決めていた(神戸栄光教会七十年史出版委員会, 1958, 4-12頁。関西学院百年史編纂事業委員会, 1997, 44-61頁)。

金雅妹は1888年、神戸で過ごす間に南メソジスト監督教会の人々と親しくなり、1889年1月5日南メソジスト監督教会日本宣教部四季会において、婦人学校と医療伝道のために採用された⁽⁷⁾。その議事録では年会まで、とりあえず月50円を支払うとされている(*Record of the Japan Mission, M. E. Ch. So., 1886-1889*, pp. 33-34)。ちなみに、この前日1月4日の議事録によると、妻帯の宣教師たちの給与が各1200円、独身宣教師たちの給与が各750円計上されている(*Ibid.*, pp. 31-32)。金雅妹には他の独身宣教師に準ずる給与が定められたのである。

1889年9月、第3回年会が開催され、そこで金雅妹は新年度の神戸地区における女性と子供のための医療活動担当者に任じられている(*Minutes of the Annual Meeting of the Japan Mission of the Methodist Episcopal Church,*

South, Third Session, 1889, p. 7)。金雅妹の担当が女性と子供のための医療活動となったのは至極当然のことであった。当時の婦人宣教師の仕事は女性の領域に限定されていたからである(小檜山, 1992, 225-226頁)。

金雅妹は1889年10月から南メソジスト監督教会の活動に従事することになっていたが、神戸における「不測の事態」のため、しばらく東京でことばの勉強や医療活動を行った⁽⁸⁾。そして同年12月4日神戸着。翌1890年2月中旬までは、校長メアリー・ランバス(J・W・ランバス夫人)が休暇で不在の神戸婦人伝道学校(現聖和大学)を手伝った(Kin, 1890, p. 27)。メアリー・ランバスの報告に、金雅妹は教室のさまざまな場面で輝かしい働きをしたとある(*Minutes of the Annual Meeting of the Japan Mission of the Methodist Episcopal Church, South, Fourth Session, 1890, p. 47*)。

また金雅妹は神戸から「南へ数時間のある町」へ、教会員の日本人医師が開いた病院の顧問として、週1回通っていた⁽⁹⁾。そしてその町の産婆たちに近代的医療を教えるための教室をも手伝ったという。しかしその病院が大きくなっていったために、周囲の医師たちの嫉妬を招き、短い期間でとりやめになったという(Bonnell, 1917, pp. 6-7)。

金雅妹は1890年2月25日兵庫に婦人と小児のための施療所を開き、まもなく神戸の自宅に事務所を開いた。日曜以外の毎日、午前・午後には診療を行い、治療した日本人の患者の数は6月までに60人を越えた⁽¹⁰⁾。患者の約3分の1は子供であった。何件かについては往診し、例外的にはあるが、男性をも治療した(Kin, 1890, pp. 27-28)

1889年度の宣教師決算報告には、医療活動で264.73ドルの支出、金雅妹の項には145.35ドルの収入がある。またこの年度の薬価収入は18.18ドルであった(*Minutes of the Annual Meeting of the Japan Mission of the Methodist Episcopal Church, South, Fourth Session, 1890, p. 41, Statistical Report*)。ボンネルの記録によれば、金雅妹は神戸で得られた医療報酬を兵庫の施療所を維持するのに投じていたという(Bonnell, 1917, p. 7)。したがって施療所には薬価収入との差し引きで264.73ドルの支出超過があり、金雅妹は

神戸の自宅から外国人または裕福な日本人を往診し、その報酬から施療所のために145.35ドルを宣教部へ献金したものと考えられる⁽¹¹⁾。

7月23日からは休暇をとり、8月30日に神戸へ戻っている (Kin, 1890, p. 27)。その間、養父母とともに過ごし、半年の成果を報告したに違いない。

1890年9月、第4回年會が開催され、金雅妹は神戸施療所に関する報告を提出した。そこで彼女は看護婦養成クラスを開き、その実習と指導のためのいくつかのベッドを設けることを提言している (Kin, 1890, p. 29)。

同年會において、金雅妹の新年度の担当は施療所と看護婦養成所と定められた (*Minutes of the Annual Meeting of the Japan Mission of the Methodist Episcopal Church, South, Fourth Session, 1890, p. 10*)。看護婦養成所に関する議論は一切記録されていないが、おそらく金雅妹の提案が容れられたものであろう。

1891年2月兵庫の施療所の賃貸契約が切れ、多聞通と有馬道の角に移転した。そこは講義所を兼ねていたらしく、週2回夜間に説教を行ったという (Kin, 1891, pp. 46-47)。J・W・ランバスが、その説教には多数の出席者があり、勇気づけられると語っている (*Minutes of the Fifth Annual Meeting of the Japan Mission of the Methodist Episcopal Church, South, 1891, p. 16*)。1891年の第5回年會においても金雅妹自身が施療所に関する報告を提出した (Kin, 1891, pp. 46-48)。1892年の第1期日本年會においても担当する女子伝道について報告したとあるが、内容は記録されていない (*Minutes of the First Session of the Japan Mission Annual Conference of the Methodist Episcopal Church, South, 1892, p. 11*)⁽¹²⁾。

1893年第2期日本年會における、新年度の任所指定には「医業 女医ワイ、エム、キン」とある (『南美以教会第二期日本年會』1893, 15頁。 *Minutes of the Second Session of the Japan Mission Annual Conference of the Methodist Episcopal Church, South, 1893, p. 9*)。しかし1894年8月9日から開催された第3期日本年會の記録には、新年度の任所指定に医業の項目がない (『南美以教会第三期日本年會』1894。 *Minutes of the Third Session of the*

Japan Mission Annual Conference of the Methodist Episcopal Church, South, 1894)。この問題について年会記録には何も記されていない、しかし *The Japan Christian Year Book* には宣教部の資金が乏しく、設備が不十分であった等の理由により、約1年半の挑戦の後、医療活動は放棄され、金医師も宣教部を辞したとある (*The Japan Christian Year Book* 1935, p. 340)。一方、ボンネルの記録には、施療所は1894年、金雅妹が結婚のため辞任し、日本を離れる間際まで続けられたとある (Bonnell, 1917, p. 6)。

ここで施療所と看護婦養成所の実態を探っておくこととしたい。まず施療所について整理すると、助手はいたものの医師は金雅妹1人であったようである。患者数・往診数・薬価収入は表1の通り。

患者数は順調に増え、往診の回数も日曜休診と考えるならば、1891年度以降一日平均3回以上になっており、まさに精力的な働きをしていたといえよう。それに応じて薬価収入も1892年度までは増えている。

このころ神戸では1890年コレラ、1891年チフス、1892年赤痢・天然痘、1893年赤痢・痘瘡、1894年赤痢と連続して伝染病が流行していた (新修神戸市史編集委員会, 1994, 付表1)。上の数字にはそのような患者も含まれていたことであろう。

一方、看護婦養成所の方は1890年9月開催の第4回年会で、その年度の彼女の任務が施療所及看護婦養成所とされたことから、少なくとも金雅妹自身はそこから看護婦養成所実現のために動き出したと考えられるが、1891年の金

表1

	患者数	往診数	薬価収入
1889年度 (明治23年3月~6月)	75	—	\$18.18
1890年度 (明治23年~24年)	150	700	\$126.14
1891年度 (明治24年~25年)	250	1000	\$53.24
1892年度 (明治25年~26年)	450	1000	\$320.00
1893年度 (明治26年~27年)	?	?	?

雅妹の報告は施療所についてのものであり、その他の年会記録を見ても、看護婦養成所が正式に開かれた形跡はない。そして1893年の第2期日本年会記録にはその名称すら挙げられていない。つまり看護婦養成所の設立は1890年9月から活動項目の中に入れられたが、実現できないまま、遅くとも1893年7月までに断念されたものと考えられる。

そして1894年には施療所も閉鎖されている。すでに挙げたようにボンネルはそれを金雅妹の結婚辞任のためとし、*The Japan Christian Year Book* は、施療所が閉鎖されたのも看護婦養成所が実現できなかったのも宣教部の資金不足のためであるとしているが、おそらくはどちらも事実の一端を示していると考えられる。

宣教部の資金不足はつまり本部である伝道局の資金不足を意味する。フロイドによれば、伝道局は1880年代末から財政的に窮乏し始め、1891年までに多額の負債を負っていた。そこへ深刻な経済恐慌によって追い打ちをかけられ、財政危機に陥った。その結果、90年代全般に亘って宣教活動を縮小させ、説教地を閉鎖させるに至ったという（広島女学院百年史編集委員会、1991、29-30頁）。

南メソジスト監督教会日本宣教部は1888年神戸に会堂を建設、1889年関西学院を建設。また1890年広島英和女学校を拡充移転したものの、1891年に同校舎を焼失、1892年同校舎を再建していた（神戸栄光教会七十年史出版委員会、1958、10-11頁。関西学院大学百年史編纂事業委員会、1997、89-95頁。広島女学院百年史編集委員会、1991、31-38頁）。看護婦養成所は、このような大きな事業、および不測の事態による再投資が続く中、延期され、その間に伝道局の財政状況が悪化したため、断念されたものと考えられる。

一方、施療所は金雅妹の離日間際まで続けられたという点から推測するに、宣教部が財政状況の悪化を理由に閉鎖したのではなく、金雅妹の結婚・離日を機に閉鎖したのと考えられる。

金雅妹はスペイン籍のポルトガル人音楽家兼言語学者 Da Silva という人物と結婚した（Maxwell, 1934, p. 414）。そして遅くとも1894年8月までに神

戸を離れた。そして中国の研究者の間では知られていないことだが、その後アメリカへ渡った。そして、そこで講演旅行を行い、いくつかの大都市で多くの関心を集めた (*The Japan Christian Year Book*, 1935, pp. 340-341)。おそらくその内容は日本での経験を中心とし、日本や中国への伝道を推進するためのものであっただろう。ここで彼女の役割は未婚婦人宣教師としての伝道活動から、アメリカから宣教師、とくに婦人宣教師を送り出すことに移ったかに見える。しかし実際にはその後離婚、帰国し、1907年(光緒33年)頃、天津の「北洋女医院」の院長として招かれ、そこに中国最初の看護学校を併設し、校長に就任することとなる(李濤, 1934, 758頁。金, 1988, 60頁)⁽¹³⁾。

6 おわりに

金雅妹はアメリカ南メソジスト監督教会の日本伝道に参加することによって、かつて養父マッカーティーが寧波で行ったような初々しい伝道に身を投じた。そして彼女は養父が芝罘においてそうしたように、あるいは養父が寧波で実現できなかった仕事を受け継ぐかのように、医療伝道に従事した。そして短い期間ではあったが産婆への教育を行い、また看護婦の養成をめざした。女性による女性を対象とする医療伝道と看護学校の運営は、当時のアメリカの婦人伝道局共通の願いでもあった(小檜山, 1992, 107, 213-240頁)。神戸における金雅妹が南メソジスト監督教会の婦人伝道局に属したのかどうかはさらに調査を要する問題だが、その願いは、宗派を越えて、婦人伝道局に関わる女性たちと共通のものであった。そして5年間の奮闘の結果、医療伝道はある程度の成功を見たが、看護婦養成所は結局実現しなかった。しかし施療所が日本を離れる間際まで続けられたという事実が示すように、彼女の医療活動への熱意は結婚によって消えたわけではなかった。そして女性のための病院と看護学校の夢は、次の世紀の中国へと持ち越されたのである。

西学院学院史資料室のみなさんのお世話になった。記して感謝の意を表します。

注

- (1) 金雅妹の名を墓碑は金韵梅とする（金韵梅墓碑）。金は金雅梅とする（金，1988，60頁）。また寧波詞典編委会は「一説にもとの名は尤梅慶」とする（寧波詞典編委会，1992，366頁）。英語表記には Yamei Kim, Yamei Kin, Y. Mae Kin, Y. May King, 日本語表記にはワイ・エム・キンがある。
- (2) 金鼎禹の名をアメリカ長老会寧波宣教部の書簡は Kyng ding yin, 金は金麟友としており，疑問が残る（1866年11月2日付寧波宣教部書簡。金，1988，60頁）。
- (3) 金は兄も雅妹とともに日本，アメリカで学んだとするが，その後についてはつまびらかでない（金，1988，60頁）。
- (4) 懐は李濤にもとづいてか，金雅妹の来日時期を養女となって3年後とし，それ以後1869年来日とするものが多い（李濤，1934，757頁。懐，1937，368頁。）
- (5) マックスウェルはマッカーティーが1881年まで中国公使館で働いたとし，以後金雅妹の渡米は1881年とされてきた（Maxwell，1934，p. 413）。
- (6) 李固陽は Chinese Asylum を華人精神病院とする（李固陽，1993，50頁）。当時のアメリカの女医は，初めに精神病院で住み込みの医師として働くことが多かったという（McGovern，1993，pp. 125-144）。
- (7) マッカーティーは神戸から発した書簡中で，W・R・ランバス達を自分達家族の古い友人であるとしており，中国において旧知であったものと考えられる（1889年2月28日付マッカーティー書簡）。
- (8) 「不測の事態」が何を指すかは不明。
- (9) W・R・ランバスも菟原郡（現神戸市）の病院で診療を行っていた（神戸又新日報，1889年4月25日）。
- (10) 第4回年会の統計には1890年3月15日からの患者数は75人とある（*Minutes of the Annual Meeting of the Japan Mission of the Methodist Episcopal Church, South, Fourth Session, 1890*）。
- (11) クランメルが金雅妹を自給宣教師としているのは，このように金が宣教部の給与以外に収入を得ていたためか（クランメル，1996，142頁）。
- (12) この年，日本宣教会（年会）が日本年会に改められた。
- (13) 「北洋女医院」については，他の名称も伝えられているが，ここでは略す。

参考文献

- 金韵梅墓碑，北京石刻芸術博物館蔵。
 懐旦「中国第一位女留学生」月報，1-2，1937，368-369頁。

- 金二南, 傳華「天津護士学校創辦概況」天津文史資料選輯, 45, 1988, 60 頁。
- 李國陽「中国第一位留学帰国の女医師」歴史大観園, 1993-1, 50-51 頁。
- 李濤「金韻梅医師事略」中華医学雑誌, 20-5, 1934, 757-758 頁。
- 寧波詞典編委会『寧波詞典』復旦大学出版社, 1992, 366 頁。
- 王緯俊「丁麗良在寧波十年宗教活動述評」浙江学刊, 1987-3, 98-102, 97 頁。
- 浙江省鄞県地方志編委会『鄞県志 下』中華書局, 1996, 2072 頁。
- 神戸又新日報, 1889 年 4 月 25 日。
- 『南美以教会日本年会記録』第 1-3 期, 1892-1894。
- J・A・ドラン著, 小野泰博・内尾貞子訳『看護・医療の歴史』誠信書房, 1978。
- 広島女学院百年史編集委員会『広島女学院百年史』広島女学院, 1991。
- 関西学院大学百年史編纂事業委員会『関西学院百年史 通史編 I』関西学院, 1997。
- 神戸栄光教会七十年史出版委員会『神戸栄光教会七十年史』神戸栄光教会, 1958。
- 小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師』東京大学出版会, 1992。
- ジャン・W・克蘭メル『来日メソジスト宣教師事典 1873-1993 年』教文館, 1996, 342 頁。
- 小澤三郎『日本プロテスタント史研究』東海大学出版会, 1964。
- 新修神戸市史編集委員会『新修神戸市史 歴史編Ⅳ 近代・現代』神戸市, 1994。
- 武内博『来日西洋人名事典』増補改訂普及版, 日外アソシエーツ, 1995。
- 渡辺正雄「生物学教師 D・B・マッカーティー」, 同著『増訂 お雇い米国人科学教師』北泉社, 1996, 179-196 頁。
- Record of the Japan Mission, M. E. Ch. So., 1886-1889. 関西学院学院史資料室蔵。
- Records of U. S. Presbyterian Missions, Japan Letters. 横浜開港資料館蔵。
- Records of U. S. Presbyterian Missions, China Letters. 横浜開港資料館蔵。
- “Miss Y. Mae Kin, M. D.,” Missionary Obituaries 1934-1935, *The Japan Christian Year Book* 1935, pp. 340-341.
- Minutes of the Annual Meeting of the Japan Mission of the Methodist Episcopal Church, South*, 1889-1894.
- Bonnell, Maud, *The Story of the Years in Japan*, Woman's Missionary Council. M. E. Church, South, 1917.
- James, Edward T., ed., *Notable American Women*, 3, The Belknap Press, 1971, pp. 161-165.
- Kin, Y. M., “Kobe Dispensary,” *Minutes of the Annual Meeting of the Japan Mission of the Methodist Episcopal Church, South*, 1890, pp. 27-29.
- Kin, Y. M., “Kobe Dispensary for Women and Children,” *Minutes of the Fifth*

- Annual Meeting of the Methodist Episcopal Church, South*, 1891, pp. 46-48.
- King, Y. May, "Photo-Micrography of Histological Subjects," *New York Medical Journal*, July-2, 1887, pp. 7-11.
- McGovern, Constance M., "Doctors or Ladies? Women Physicians in Psychiatric Institutions, 1872-1900," Nancy F. Cott. ed., *Professional and White-Collar Employments*, Part I, Munich, etc. 1993, pp. 125-144.
- Maxwell, J. Preston, "DR. YAMEI KIN," *Chinese Medical Journal*, 48, No. 5 (May, 1934), pp. 412-414.
- Murray, David, "Divie Bethune McCartee M. D.," *New York Observer*, July 17 1902, pp. 73-74.
- Rankin, Henry William, "Divie Bethune McCartee, M. D., Pioneer Missionary. A Sketch of his Carrer," *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, 30, No. 10, Oct. 1902, pp. 497-503.
- Shoemaker, J. W., tr., "Divie Bethune McCartee, A Missionary Doctor of Ningpo, A Chinese Tribute," *Record of Christian Work*, 23, No. 3 (March, 1904), pp. 171-176.
- Speer, Robert E., ed., *A Missionary Pioneer in the Far East, A Memorial of Divie Bethune McCartee*, New York, Chicago, etc. 1922.